

the pioneer 笑人

匠の技を伝え学び、常に新しい道を切り開く事で笑顔の花を咲かせる開拓者-Pioneer-。今と未来のTSSを開拓する人物にせまるこのコーナー。第5号は、広川晴夫氏に登場してもらう。

技術者には満足って言葉がないのかもしれない

達成感を得るため自分を磨く

『〇〇って何だろ？知りたい！』って思いで勉強した知識が、偶然仕事に活かされた…そのなんとも言えない“自己満足”がクセになるわけ。自分にピッタシの仕事に出会える人なんてそういない。与えられた仕事を続け、達成感が得られる様に、楽しくなる様に自分を磨くっていうのかな。』

『楽しくしなきゃ仕事なんて、とてどもとて…』と語る広川。仕事に楽しみを見出す大切さを知る広川は、どんな道を歩んできたのだろうか。

入社三十七年 今だ見習い

富山出身の広川は、田又(碧三号掲載)とは高校時代の遊び仲間。当時、彼は予備発電機設計の仕事をしていたが、『富山に新しい会社を作る事になったから、ちよつと来て手伝えよ』と田又さんに言われ、二つ返事で富山精研社に入社した。が…

『何やつてる会社か分からなかったの、ひとまず東京精研社で実習生として…それからずーっと富山に帰ってないので、今だ見習いの身です(笑)』

その頃は設計の部署はなく、加工と製造のみ扱っていたTSS。それらの技術や知識を持っていなかった広川は、『この会社では自分に来ることは何もない』と諦めモードに。そんなある夜、住み込みをしていた社長宅を飛び出してしまふ！着いた先は上野。彷徨った末、とある映画館へ。眩しく映るは、『男はつらいよ 知床慕情』

「良いとこだなあ…で、そのまま行った。網走とか知床…一週間後ぐらいに電話したら、『何処いるんだ!?』って。他にも小さいのは数回…サボり癖だね。あの頃はいい加減だったんだな、今もだけど(笑)」

技術者⇨貪欲であること

TSSが初めて設計込みで受注した、レーザー管製造の仕事。今のマシン製造の走りの存在であるこの案件を担当したのは広川だった(他に図面を描く人がいなかっただけ・本人談)。前職で得た電気設計の知識はあったが、その他は全くの素人。自分よりも若い客先担当者から指導を受け、失敗を繰り返して力をつけた。

『寸法の入れ方がなつとらん』って。でも有難かった、教えてもらえるなら何でも。今でも機械を見せてもらえるなら、世界の果てまで飛んでつちやう。』

「偉そうに言えないけど…技術で飯を食うには、実践で結果を出すには…常に自分に知識を求めなきゃだと思えます。さらに正確さも必要で…技術者には満足っていう言葉がないのかもしれないね。」

「図面は丁寧に。誰からも絶対に間違われたい様に」

これは、以前勤めていた会社で広川が受けた言葉。自身の図面の書き方が原因で間違った製品を作られてしまった時の、客先担当者からの一言だ。厳しい言葉だが、彼の技術者としての心構えと言えるかもしれない。

「当時は手書きで、時間がかかるから



広川 晴夫
Haruo Hirokawa

1949年生まれ。富山精研社、東京精研社、トータル・サウンド・スタック、TSSと渡り歩いて37年。典型的A型人間(本人談)で、座右の銘は「怒りは敵と思え」(今だに出来てませんが:本人談)。「男は仕事」のスタイルで家庭の事はほったらかしに…。仕事ではそれなりに、家族の事については多少の後悔あり(本人談)。

ら手抜きしたりしてただけど、『そうやって図面を書くこと自体が間違ってる』と。誤解されない様に、問合せが来ないように、字を丁寧に書いて、手を抜かない。それで手間暇かかってもそれは必要なものなんだよね。」

必要なのは自分ではなく…

『十年後を語るのに自分の意見は必要ない』と言う広川。激動の時代を生きたからこそその道標的哲学。それを必要ないと語る真意は…。

「遺言的意见はあまり意味が無いと思うから。私達団塊世代の『働いてさえいれればいい』って言うのは、今は成立しないでしょ。今の人は努力して、成果出して、対価をもらう…自分を売り込んでいくっていうか。そういう燃える様な情熱を持つ人が、将来を作っていくんじゃないかな。」

(敬称略)